

まず初めに、このような貴重な留学の機会を頂きましたことに感謝申し上げます。

オーストラリアは南半球に位置しており、私たちが訪れた8月は冬でした。オーストラリア国内でも差はありますが、私たちが滞在していた **Yeppoon** は、日本の秋のような気候で昼間には気温が20℃以上にまで上昇し、夜間には10°前後まで冷え込みます。**Yeppoon** は自然豊かな場所で、ホストファミリーの家から徒歩15分でビーチがあり、休日には釣りに行きました。また、現在ではそれほど深刻ではないそうですが、年間の雨量が少ないオーストラリアでは水不足に悩まされており、私が滞在した家庭にも水を貯めるタンクがあり、シャワーは10分以下で済ますように、と言われました。降水量が少ない反面、快晴の日が多いためほとんどの家の屋根に太陽光パネルがついていました。土地面積が広いのでほとんどの家が平屋で、アパートやマンションはほとんどありませんでした。庭を持っている家が多いためかほぼすべての家が犬や猫と言ったペットを飼っていました。

生活スタイルに関しても日本と異なり、自転車はあまり見かけませんでしたが、町中に電動キックボードのレンタルスポットが点在しており、日本より道幅が広いので国民に浸透しているように感じました。食生活においても日本ではおかずパンや甘いパンなど様々な工夫を凝らしたパンが売られていますが、オーストラリアではパンのみで完結させるのではなくにかおかずと食べられるような味のついていないパンが多く、コメ文化である日本とは違った点でした。日本のスーパーよりもりんごなどのフルーツの種類が多く、惣菜コーナーのようなものはありませんでした。ビートルートという赤いカブのような野菜がよく食べられていたりもしました。

キャッシュレス決済についても日本より導入が進んでおり、現地の人も現金を持たず、スマホ一台だけで過ごしていました。

環境への取り組みとしてペットボトルや缶をリサイクルすると10セント戻ってくるという取り組みを行っているそうです。

学校制度も日本と異なり、クイーンズランド州は高校まで学費は無料ですが、中学3年生より先の学年は就職、働き口が見つかっていれば、途中退学もできるようです。

Yeppoon 高校には **tuck shop** という学校が提供する購買のようなものがあり、日本では生徒から設備維持費などを集金しますが、クイーンズランド州の多くの学校では **tuck shop** での売り上げで維持費を賄っているようです。お金に困窮している家庭は積極的に家から昼食を持ってくることで節約でき、多くの人が学校に通いやすい状況をつくっているそうです。学校は70分4時間授業で、先生は各自の教室を持っておりそれに合わせて生徒が毎時間移動するという形でした。

犬と散歩した際、日本では目にしない赤い花について勇気を出して聞いてみたところ、その形状から **bottle brush** と呼ばれている植物だそうで、花の蜜にアルコールが含まれていて、蜜を飲んだゴシキセイガイインコという虹色の鳥が酔って木の周りで倒れる、と教えてくれました。表現が難しく、説明も一度ではわからなかったのですが根気強く聞くことで理解でき、挑戦してよかった、と感じる瞬間でした。英語が伝わった経験が自信となり大学で学んでいたホストファザーと宇宙、ブラックホールについて話し合い、話したことで夜に絶好の星空の観測スポットに連れて行ってもらうなど挑戦する勇気や自信を持つことができました。

日本ではアメリカ英語を学んでいるという部分と関係してなのか、オーストラリアの人々の英語は多少聞き取りづらい部分がありました。オーストラリアでない国をバックグラウ

ンドとしている人の英語もアクセントが異なり、それぞれのアクセントから相手がどのような国をバックグラウンドとしているのかわかり、国際言語である英語ならではの特色を感じた場面でした。ジェンダーへの意識の違いも言語から感じました。日本語と違い主語が必要な英語ではメールを書く際に、名前、メールアドレス、役職に併せてなんと呼ばれたいか(Gender pronouns)she/herなどと記載するということを知りました。

ロックハンプトンで行われたリバーフェスティバルに参加し、そこでは焼きそばやたこ焼きの屋台があったり、Origami と書かれた折り紙体験スペースや wa-bi sa-bi という言葉も目にしました。現地では書道や紙風船、駄菓子、縁日の祭囃子などを紹介しました。どれも喜んでくれ、学校で駄菓子を紹介した際にはクイーンズランド州のスイーツの Lamington cake をくれるなど互いの国のお菓子を紹介し合いました。きのこの山や麩菓子が現地の生徒に意外と好評でした。他にも抹茶、フグ、生きがい、など様々な日本語が現地でも使われていました。意外にも現地でお酒の「氷結」が人気で日本と同じパッケージの氷結をスーパーやホームステイ先の冷蔵庫に見かけました。

アボリジナルの文化を展示している博物館にも訪れ、ディジュリドゥと呼ばれる特有の楽器の演奏を生で聞き、ブーメランの体験もしました。アボリジナルの文化の歴史も教えていただき、模様の独特の色彩を用い、特有のリズムを持ったアボリジナルアートにとっても惹かれるとともに文化の持つ歴史や実際の暮らしを知る貴重な機会となりました。また、Yeppoon の街中にはストリートアートが点在しており、日本よりもアートが身近なものに感じられました。何度か現地のスーパーに行き、商品パッケージの違いに気づきました。オーストラリアの商品パッケージは人口的な色、原色や蛍光色が多く、配色に関しても目立たせるためなのかどの商品も補色を入れており、インパクトのあるものばかりで、日本のパッケージの多くは目に優しいような色合いであるのだと気がつきました。

ブリスベンでは在ブリスベン日本国総領事公邸にご招待いただき、クイーンズランド州教育省の方や埼玉県人会の方々とともにアフタヌーンティーパーティーに参加させていただきました。大使から日本とクイーンズランド州の政治面、経済面など多様な面での強固な繋がりを教えていただき、埼玉県人会の方からもお話をいただくなどとても有意義な時間を過ごさせていただきました。ブリスベン滞在の 2 日目にはドリームワールドという遊園地、動物園に訪れ、埼玉親善大使の仲間との最後の 1 日を楽しむことができました。最終日以外にも何度か動物園に行く機会がありオーストラリア固有の動物であるコアラやカンガルー、ウォンバットなど様々な動物を見たり触ったりしました。コアラの抱っこ体験もし、意外と爪が鋭いことや重いこと、水を弾きそうな硬く疎密性の高い毛の手触りなど写真だけではわからないことを学ぶことができました。

最後に今回の研修全体を振り返り、Yeppoon は、高いビルもなく、空が広く、少し行けば海や山、果てしなく広がる大地があり、プラネタリウムでしかみたことがないような満天の星空が広がっている、そんな土地でした。日本にいとどこまでもコンクリートで覆われた大地に住宅街、高層ビル、公共交通機関でどこにでもすぐに行けてしまいましたが、実際にオーストラリアで過ごしたことで、人間はまだ自然の中で生きさせてもらっている、ということを再認識しました。今回の研修は文化や環境の違いを知る良い機会になりました。これからも研修で得た経験を埼玉県、日本に活かせるよう努力していきます。



(Bottle brush)

